

農業排水モニタリング調査(懸濁物質)

岡村貴司・幡野真隆

◆背景・目的

琵琶湖には春先に農業排水が流入し、漁場の一次生産力の低下や底質環境の悪化、魚類への影響が懸念される。そこで、懸濁物質(SS)、農薬、栄養塩など一連の汚濁・汚染負荷について調査してきた。

本研究ではモニタリング調査等を継続的に実施し、琵琶湖への負荷の状況や環境の動向を把握することを目的とする。

◆成果の内容・特徴

○農業排水モニタリング調査

- ・承水溝(近江八幡市牧町、農業排水路の琵琶湖流入口)では、SS濃度が4月下旬から5月中旬に高くなり、昨年とほぼ同様の動向を示した。

○ヨシ帯内へのSS流入状況調査

- ・4月下旬から6月上旬にかけて、近江八幡市牧町のヨシ帯を調査したところ、ヨシ帯周縁部では5月上旬から下旬にかけてSS濃度の上昇がみられたが、内側では農業排水の流入による濃度の上昇はみられなかった(図2)。

○宇曾川濁水流出状況調査

- ・4月10日から5月30日の期間中、透視度30cm以下の期間は27日間であり、昨年より9日間長くなっていた。

◆成果の活用・留意点

- ・排水の流入は毎年みられるため、今後も継続してモニタリング調査を行うとともに一次生産力や底質環境を把握する必要がある。

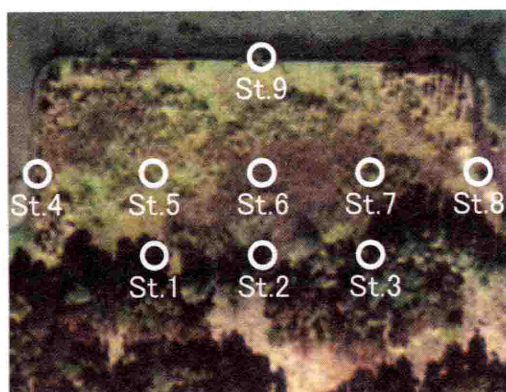


図1 ヨシ帯調査地点図(近江八幡市牧町地先)

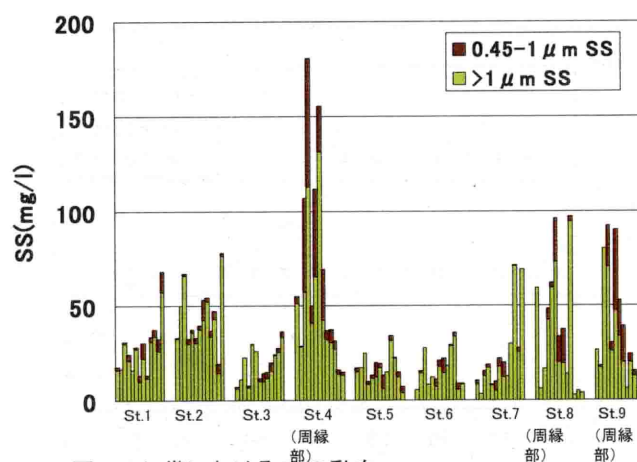


図2 ヨシ帯におけるSSの動向

各調査地点毎に右から左にかけて

4/24、4/27、5/1、5/4、5/9、5/11、5/15、5/18、5/22、5/25、5/29、6/1、6/5